様式④

**教員活動状況報告書**

提出日：令和 5　　年 　 8　 月　　21　　日

 　 　 所　属： 獣医 学部 　 獣医　　　学科

氏　名：　折戸謙介 　 職位： 教授

役　職：　学園理事・病院長

**Ⅰ　ティーチング・ポートフォリオ**

**１．教育の責任（教育活動の範囲）**

大学：病態、臨床、産業、環境獣医学系の科目を深く理解できるように、生理学的立場から基礎的な考え方を学生が会得できるように授業を実施している。

大学院：生命現象の深い理解を基に、自ら課題を見出し解決する能力を会得できるように授業を実施している。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 科目名 | 学科・専攻 | 必，選，自 | 配当年次 | 受講者数 |
| 獣医生理学I | 獣医学科 | 必須 | 1 | 159 |
| 獣医生理学II | 獣医学科 | 必須 | 2 | 151 |
| 獣医生理学実習II | 獣医学科 | 必須 | 2 | 180 |
| 総合獣医学 | 獣医学科 | 必須 | 6 | 133 |
| 獣医生理学特論I | 獣医学科 | 必須 | 6 | 2 |
| 獣医生理学特論II | 獣医学科 | 必須 | 6 | 2 |
| 卒業論文 | 獣医学科 | 必須 | 6 | 2 |
| 動物生理学 | 動物応用科学科 | 必須 | 1 | 143 |
| 獣医生理学特別演習I | 獣医学専攻 |  | 1 |  |
| 獣医生理学特別演習II | 獣医学専攻 |  | 2 |  |
| 獣医生理学特別演習III | 獣医学専攻 |  | 3 |  |
| 獣医生理学特別実験I | 獣医学専攻 |  | 1 |  |
| 獣医生理学特別実験II | 獣医学専攻 |  | 2 |  |
| 獣医生理学特別実験III | 獣医学専攻 |  | 3 |  |
| 獣医生理学特別実験IV | 獣医学専攻 |  | 4 |  |

**２．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）**

　生理学関連科目 (獣医生理学：獣医学科1年次必須科目、動物生理学：動物応用科学科1年次必須科目) では、動物やヒトの生命現象を、学生にとって初めて聞く言葉で理解しなければいけないことが少なくない。学生の向上心を維持し、目標を失わないように、なぜ今、生理学を学ぶのか？生理学はどうして必要であるか？を、臨床症例の診断・治療方法や解き明かされた生命現象の生物学、獣医学、医学への応用などについて、写真や動画を交えて説明をするようにしている。これにより、学生が生理学を学ぶ意義を実感し、獣医学を6年間（動物応用科学科では4年間）学ぶ目標を明確にできるようにしている。

　大学院の獣医生理学関連科目では、基本となる従来からの科学的知見と最新の科学的試験を融合して理論展開し仮説を構築することで、普遍的な成果が得られるように、研究をくみ上げることができるようにしている。

**３．教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）**

授業毎に、学ぶべきテーマと共に到達目標を冒頭に提示する。これにより学習の方向性を学生が把握できるようにしている。例えば、獣医学科2年次前期必須科目「獣医生理学II」の「循環I」では、到達目標として以下の4つを提示している。「血管の種類とその機能」「血圧と循環血液量の関係」「毛細血管の機能」「血液と間質液との物質交換」

生理学で学ぶ内容は、神経や細胞、器官などのはたらきを理解することが主軸となっている。目に見える形として現れるまでのプロセスを説明することで、理解を深められるようにしている。解剖学や組織学とのつながりを見つけることで、動物の身体の機能を深く理解できること、”正常”を理解することで、”異常（＝疾病）”のメカニズムや治療方法の理解につながることを、例を挙げて授業を展開している。例えば、犬の大発作てんかん症例の臨床徴候の動画を講義の冒頭で紹介する。その後、興奮性神経と抑制性神経の生理機能について解説し、てんかん焦点になりやすい海馬の解剖学的位置と機能、生理学的神経異常と治療につながる薬とそのメカニズムについて解説している。

**アクティブラーニングについての取組**

講義後に、当日のテーマに沿ったミニテストやレポート課題を提示している。次の授業で、これらの解説を、講義用資料を活用して実施することで、学生の理解を深めるようにしている。

**ICTの教育への活用**

　講義用資料の配布と講義動画はGoogleシステムを利用して実施している。講義はすべて録画して受講学生に定期試験まで公開し、復習ができるようにしている。

**4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（**分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（A）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) （A）

⑤双方向授業への工夫（B）

　学生が系統立てて理解できるように講義内容を組んでいるが、これをさらにブラッシュアップする必要がある。また理解を助けるためのスライドを追加していく。

　双方向性は、講義の休憩時間、講義後の時間、他の曜日、時間帯において、学生からの質問に答える形式で進めている。学生が学びやすく、また質問しやすい環境を整えていく。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V学科，M学科の教員の方のみ記載してください。）

獣医生理学I (1年次後期) と獣医生理学II (2年次前期) では、共用試験と国家試験が学ぶ先にあること、これに必要なのは知識と、科目間の知識のつながり、即ち、科目単独での理解が求められているのではなく、同学年の他科目や高学年の応用科目との知識のつながりが大切であることを、常に伝えるようにしている。定期テストは、国家試験の出題形式と同様のマークシート形式としているが、覚えていれば回答できるような問題ではなく、思考力を問う問題を多く出題している。

**5.学生授業評価**（分量の目安：４～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

(1) 獣医生理学Iでは、内容が難しい、説明が速すぎるという意見があった。これに対応するため、生理学的思考を会得するのが苦手な学生も復習ができるように、授業で使用する各スライドには引用元の教科書のページを示している。さらに、講義はすべて録画し、定期試験まで復習が可能なように提供している。

② ①の結果はどうでしたか。

「難しい」、「スライドに説明する内容を全て書いてほしい（覚えるだけにしてほしい）」との意見があった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

生理学的思考力を身に着けることが本科目の目的であることを今後も伝えていく。

**6.学生の学修成果**（分量の目安：４～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については，学内で共有させていただく予定です。）

一部の学生向けになってしまうが、大学での学習は、高校のテスト勉強や受験勉強とは異なること、テストのための一時的な学習にならないようにする必要があることを、易しく解説している。また生理学の重要さや興味深さを継続して学べるように、臨床症例の動画を教材に取り入れて講義をすすめていく。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

授業評価より、基礎系である獣医生理学I、獣医生理学IIは、今後学ぶ病態系科目、臨床系科目を深く理解するために必要であることを実感していることがわかった。

**7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）**（分量の目安：1～2行（40字～80字））

　麻布大学で実施されているFDに関する講演、セミナーには参加している。

**8．今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）**

**9．添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ**

**該当を〇で囲む**

**有・無**

**●FD研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施**

**●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。**